様式Ｃ-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23 年　6 月　9 日現在

機関番号：32612
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2008～2010
課題番号：20520090
研究課題名（和文）　大西克禮における西洋美学の批判的受容と日本人の立場からの体系的美学の構築
研究課題名（英文）　The critical reception of Western aesthetics and the construction of systematic aesthetics from a Japanese point of view by Yoshinori Onishi
研究代表者
大石　昌史（OISHI　MASASHI）
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号：60223723

研究成果の概要（和文）：
大西克禮（1888～1959）の美学研究を、西洋美学の批判的受容、日本人の美意識の理論化、東西の美意識を統合した体系的美学の構築の三段階に分け、それぞれにおける彼の解釈・主張の正当性について、典拠とされたテクストと対照しつつ厳密に検討し、彼の美学を、感情移入論および美意識の現象学を含む超越論的美学の発展として位置づけることによって、その歴史的ならびに現代的な意義を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
The development of aesthetic study by Yoshinori Onishi(1888－1959) is divided into the following three stages: the critical reception of Western aesthetics, the theorization of Japanese aesthetic consciousness, and the construction of systematic aesthetics which integrates Western and Eastern aesthetic consciousness. I have strictly verified his interpretation and assertion in comparison with original text which he referred to. And by putting his theory in the historical development of the transcendental aesthetics including the empathy theory and the phenomenology of aesthetic consciousness, I have demonstrated the historical position and the contemporary significance of Onishi's aesthetics.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史
キーワード：西洋美学、日本美学、芸術学、比較思想、自然観、芸術精神、感情移入、ロマン主義

１．研究開始当初の背景

大西克禮（おおにし よしのり、1888～1959）は、東京帝国大学教授として近代日本の講壇美学もしくは理論的美学を代表する学者でありながら、没後 48 年（申請当時）を経て、未だ歴史的な評価を含む本格的な研究は為されていなかった。これには、同時代の欧米の研究動向を過度に重視し、日本人の研究を軽視する日本独特な学問風土が反映されているのであるが、近代日本における美学研究の大成者である大西の業績が正当に継承されず、それに伴う美学研究の質的低下が危惧される現在の状況において、学問的遺産を未来へと引き継ぐためにも、彼の美学の総合的な研究・評価は急務であると思われた。

報告者がこの研究の着想を得たのは、平成 13・14・15 年度の 3 年間、東京大学の佐々木健一教授（当時）を研究代表とする基盤研究(A)(1)「日本の近代美学（明治・大正期）」に「阿部次郎と感情移入美学」を分担課題として参加していた時であった。阿部次郎（1883～1959）は、東京帝国大学において大塚保治（1868～1931）の教えを受けた、大西克禮の先輩であり、その後の国費によるヨーロッパ留学、帝国大学の美学講座担当教授への就任（阿部は東北帝国大学、大西は東京帝国大学）といった経歴においても、両者はよく似ている。しかし、公刊された著作においては結局リップスの感情移入美学の紹介に留まり、独自の美学を構築することができなかった阿部に対して、大西は、死後の出版とはなったが、東西美学を統合した独自の体系的美学の構築に成功している。阿倍の挫折、あるいは大西の後にも（諸理論を総括しそれを体系的に記述したものを除けば）日本人による体系的美学の呈示がほとんど見られないことが示すように、同時代の西洋美学の移入を超えて日本人が独自の体系的美学を構築することは極めて困難なことである。そのような事情から、西洋と日本の美意識を統合する大西の体系的な美学理論を、哲学あるいは倫理学研究の領域における稀有なまた傑出した例である西田幾多郎（1870～1945）の（宗教）哲学、和辻哲郎（1889～1960）の倫理学と並んで、日本人の立場からの独創的な美学と呼び得るものなのか、その内容について西洋近代美学、日本の伝統的美学、それぞれの理解にまで遡って実証的に検討し、その有効性と限界とについて批判的に検証することの必要性が強く意識された。

２．研究の目的

大西克禮（1888～1959）の美学について、彼の研究の発展に従って、西洋美学の批判的受容（『美學原論』、『現代美學の問題』、『カント〈判断力批判〉の研究』、『美意識論史』、『現象學派の美學』、翻訳：ジムメル『レムブラント（藝術哲学試論）』、ギュイヨー『社会學上より見たる藝術』、カント『判断力批判』、等）、日本人の美意識の理論化（『幽玄とあはれ』、『風雅論 ――〈さび〉の研究』、『萬葉集の自然感情』、『自然感情の類型』）、東西の美意識を統合した体系的美学（『美學』、『浪漫主義の美學と藝術観』、『東洋的藝術精神』）の三段階に分け、それぞれにおける大西の解釈・主張の正当性を、典拠とされた西洋近代美学ならびに日本の伝統的美学のテクストと対照しつつ実証的に検討する。さらに、これらの検討を通じて、日本人の立場から東西の美意識を統合した体系的美学の構築という、言わば個別と普遍とを統合しようとした大西美学の試みが、歴史的ならびに現代的な観点からいかなる意義を有するかを総合的に明らかにする。

３．研究の方法

(1) 平成 20 年度

研究の初年次にあたる平成 20（2008）年度は、大西の「受容期＝西洋美学の批判的検討に努めた時期」の諸著作・翻訳について、典拠とされたテクストと対照し、それに関する他者による研究書も参照しつつ、彼の理解・解釈あるいは批判の正当性を検証した。その際、能率を配慮して、研究対象を以下の六つの分野に分け、それぞれの右（および下）側に記した大西の著作・翻訳に即して研究した。

①カントと新カント派（コーヘン）：『美學原論』、『現代美學の問題』、『カント〈判断力批判〉の研究』、翻訳＝カント『判断力批判』

②心理学的美学（実験美学(フェヒナー)、感情移入(リップス)）：『美學原論』、『現代美學の問題』

③現象学的美学（ガイガー、オーデブレヒト）：『現象學派の美學』

④社会学的美学（ギュイヨー）：翻訳＝ギュイヨー『社会學上より見たる藝術』

⑤生の哲学（ジンメル）：翻訳＝ジムメル『レムブラント（藝術哲学試論）』

⑥美学史研究：『美意識論史』

このような西洋近代美学の理解に関する比較研究は、広範に亘りかつ資料の収集状況とも関係するため、次年度以降も引き続き行った。

(2) 平成 21 年度

研究の二年次にあたる平成 21（2009）年度は、昨年度に引き続き大西による西洋美学の批判的受容について検討するとともに、彼の美学研究における「応用期＝日本的美意識の理論化に努めた時期」に分類される伝統的な日本の美学（美的な自然感情を含む）に関する著作についても、他の研究者による日本の古典的な文芸理論の研究とも対照しつつ、実証的に検討した。当該年度、新たに考察の対象とした著作は、日本の美学について書かれた

①『幽玄とあはれ』

②『風雅論 ――〈さび〉の研究』

③『萬葉集の自然感情』

④『自然感情の類型』の四冊である。

(3) 平成 22 年度

本研究の第三年次（最終年次）に当たる平成 22（2010）年度は、引き続き大西の西洋・日本美学研究について、それぞれの典拠となる原典と比較・検討するとともに、彼の思想展開における「綜合期＝東西の美意識の体系的綜合に努めた時期」に分類される美学研究の諸著作（遺稿）も考察の対象とした。特に、美的体験論と美的範疇論とに二分される体系的美学の構成、美の特殊類型として東西の美的範疇を相関的に捉える態度、そして、東西の美意識の比較研究（比較美学）の内実について詳細に検討し、本研究を総括する形で、このような体系的な理論の現代的な意義を考察した。主に考察の対象とした著作は、

①『美學』（上・下）

②『浪漫主義の美學と藝術観』（『浪漫主義の美学』の増補版）

③『東洋的藝術精神』の三作（四冊）である。

４．研究成果

(1) 平成 20 年度

研究の初年次にあたる平成 20（2008）年度は、大西克禮の美学研究において「受容期＝西洋美学の批判的検討に努めた時期」に分類される諸著作・翻訳のうち、『美學原論』（不老閣書房、大正 6(1917)年）、『現代美學の問題』（岩波書店、昭和 2(1927)年）、『カント〈判断力批判〉の研究』（岩波書店、昭和 6(1931)年）、『美意識論史』（岩波書店、昭和 8(1933)年／角川書店、昭和 24(1949)年）、『現象學派の美學』（岩波書店、昭和 12(1937)年）、翻訳：カント『判断力批判』（岩波書店、昭和 7(1932)年／岩波文庫（上・下）、昭和 15(1940)年）に

ついて、それぞれの研究対象であるカント(Immanuel Kant)の超越論的美学、コーヘン(Hermann Cohen)の純粋感情論、Th・リップス(Theodor Lipps)、フォルケルト(Johannes Volkelt)の感情移入美学、ガイガー(Moritz Geiger)、オーデブレヒト(Rudolf Odebrecht)の現象学的美学に関する主著ならびにそれらに対する研究書・研究論文と対照し、大西の理解あるいは批判がテクストに即して正当なものと言えるのか詳細に検討した。本研究のうち、美意識の構造に関する研究成果の一部は、平成 20 年 10 月、第 59 回美学会全国大会における口頭発表（「場所的想像力――形象性を包越した関係性の表象」）のなかで公表した。

(2) 平成 21 年度

研究の第二年次に当たる平成 21（2009）年度は、昨年度から引き続き大西克禮による西洋美学（特に美意識の理論）の批判的受容について検討するとともに、新たに彼の「応用期＝日本的美意識の理論化に努めた時期」に分類される伝統的な日本美学（美的な自然感情を含む）に関する研究について、後の時代を含む他の研究者による日本の古典的な文芸理論の研究とも対照しつつ、実証的に検討した。今年度新たに検討の対象とした著作は、『幽玄とあはれ』（岩波書店、昭和 14(1939)年）、『風雅論 ――〈さび〉の研究』（岩波書店、昭和 15(1940)年）、『萬葉集の自然感情』（岩波書店、昭和 18(1943)年）、『自然感情の類型』（要書房、昭和 23(1948)年）の四冊である。研究の方法・内容は、昨年度と同様であるが、これらの著作の通常の読解に加えて、そこにおいて大西が引用・紹介している諸理論について、典拠となる研究書・研究論文のテクストと対照し、大西の理解あるいは批判がテクストに即して正当なものと言えるのか検討した。

(3) 平成 22 年度

研究の第三年次（最終年次）に当たる平成 22（2010）年度は、昨年度から引き続き大西克禮による西洋・日本美学研究について、それぞれの典拠となる原典と比較・検討するとともに、彼の思想展開における「綜合期＝東西の美意識の体系的綜合に努めた時期」に分類される美学研究の諸著作（遺稿）も考察の対象とした。今年度新たに考察の対象とした著作は、『美學』（上・下、弘文堂、昭和 34・35(1959・1960)年）、『浪漫主義の美學と藝術観』、（弘文堂、昭和 43(1968)年、『浪漫主義の美学』(弘文堂、昭和 36(1961)年の増補版)、『東洋的藝術精神』（弘文堂 昭和 63 年(1988 年)10 月 4 日発行）の三作（四冊）であり、これらの著作を対象に、美的体験論と美的範疇論とに二分される体系的美学の構成、美の特殊類型として東西の美的範疇を相関的に捉える態度、そして、東西の美意識の比較研究（比較美学）の内実について詳細に検討した。さらに、本研究を総括する形で、日本人の立場から東西の美意識を統合した体系的美学の構築という大西の試みが、感情移入論ならびに美意識の現象学を含む超越論的美学の展開においていかなる意義を有するかを総合的に考察した。これらの研究の概要は、平成 22 年 6 月 5 日、美学会・東部会例会（慶應義塾大学）において、「大西克禮と超越論的美学」と題して発表した。また、大西の美意識論を批判的に継承した研究代表者独自の見解を、同年 8 月 9 日、XVIIIth International Congress of Aesthetics in China (Beijing, Peking University)において、“The Logic of Imagination”と題して発表した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①大石昌史「存在了解としての体験と解釈――美学と解釈学との対立を超えて」三田哲学会編『哲学』（査読有）第 127 集（2011 年）：慶應義塾 150 年記念・三田哲学会論文集『自省する知 ――人文・社会科学のアクチュアリティー』［2011 年 3 月］所収（pp.201-226）

②大石昌史「芸術経験における〈自己=意味=像〉としての象徴の生成」美学会編『美学』（査読有）第 60 巻第 1 号(通号 234 号)［2009 年 6 月］所収（pp.16-29）

③大石昌史「相関と反転 ――文の構造と意識の運動に即した場所的論理の解明」『西田哲学会年報』（招待講演原稿、査読無）第 5 号［2008 年 7 月］所収（pp.1-20）

〔学会発表〕（計 3 件）

① Masashi Oishi, “The Logic of Imagination: dialectics of objectification and signification through the correlative and the self-reflective relationship between subject (the inner) and object (the outer)”. XVIIIth International Congress of Aesthetics in China (Beijing). August 9, 2010. Peking University (Beijing).

②大石昌史「大西克禮と超越論的美学――美意識論としての美学とその体系化」美学会東部会平成 22 年度第 1 回例会、平成 22（2010）年 6 月 5 日、慶應義塾大学（東京）

③大石昌史「場所的想像力 ――形象性を包越した関係性の表象」美学会第 59 回全国大会、平成 20（2008）年 10 月 11 日、同志社大学（京都）

〔図書〕（計 1 件）

① Masashi Oishi（共著）“Japanese Aesthetic Consciousness and the Logic of <Field>: An explanation of <*mono-no-aware*> [sympathy with things] through the dynamic psychic structure of relation and reversal” [論文名], in *XVIIth International Congress of Aesthetics, Congress Book II: Selected Papers* [書名], edited by Jale N. Erzen, SANART [出版社名], May 2009, (pp. 199-205 総ページ数 341).

６．研究組織

(1)研究代表者

大石 昌史（OISHI MASASHI）
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号：60223723

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし